

『太平広記』鬼部説話の構成——鬼十一・鬼十五——

The ghost stories of "Taiping Guangji" vol.11 ~ vol.15

三田 明弘

MITTA Akihito

はじめに——鬼話の六種類の話型——

本稿は、唐代までの中国鬼話の集大成である『太平広記』鬼部説話四十巻のうち、「巻三二六 鬼十一」から「巻三三〇 鬼十五」までの鬼話の特徴を分析しつつ、南北朝から初唐・盛唐時期の鬼話の特徴を解き明かすことを目指したものであり、論者の既発表論文「『太平広記』鬼部説話の構成——鬼十一・鬼十五」⁽¹⁾（以下「前稿」と呼称）の続編である。

『太平広記』は、宋までに成立した説話から七〇〇〇余話を類聚した、中国説話の集大成とも言える全五〇〇巻の説話集である。巻毎に所収説話の分類項目が見出しに立てられており、全体では九十二項が立項されている。このうち「鬼」は巻三一六から巻三五五まで四十巻に及び、巻一から巻五五まで五十五巻の「神仙」に次ぐ大項目となっている。

前稿では「巻三二六 鬼一」から「巻三三〇 鬼十」の説話を分析し、鬼話の代表的な話型パターンを6種類に大別した。以下にそれを掲げる。

①冥婚譚 男が女の鬼と結婚するパターンが多く、女と男の鬼の例は少

ない。跡継ぎの子を産む場合も有るが、夫婦は長く共に暮らすことはない。

②塚墓宿泊譚 一夜の宿を借りた家が、翌日見ると墓であったという話。冥婚譚にもよく見られる話型である。

③変鬼婦還譚⁽²⁾ 鬼となった家族や友人が帰ってくる話。死後の自分の身分・境遇、鬼ゆえに知り得る現世の人々の未来、冥界の秘密などを鬼が語る。仏教の影響が強まるにつれて追福を求めるパターンも増えてくる。再婚した配偶者への憎悪から鬼が出現し、かつての妻や夫に危害を加える例も多い。

④冥界召喚譚 冥界の吏である鬼が人を冥途に召喚する。命に従い冥途に赴く話もあるが、賄賂や身代わりなどの手段で死を免れようとする話が多い。

⑤鬼神遭遇譚 外や自宅（廁）の例も多い）などで鬼に遭遇するという話型。逃げたり争ったりする展開の場合は、その場で取り殺されなくても、間もなく絶命する話が多い。鬼神に改葬や廟の修復を依頼されるとい

パターンも少なくない。

⑥凶宅鬧鬼譚 家に鬼が居着いて、家人を悩ませるという話型であり、初期の鬼話にも多くのバリエーションが見られる。その家の元の持ち主であったり、外から来たり鬼の出自も様々であるが、振る舞いも騒霊現象程度から家人の命を奪う話まで多岐にわたる。食を盗む、食を求めるという要素が多くに見られる。例は多くないが、家の人を助ける鬼の話もある。

本稿では、「卷三二六 鬼十一」から「卷三三〇 鬼十五」までの全鬼話のタイトルと概略を掲げ、それらを右に掲げた話型一覧に基づき、話型毎に分類した上で分析を行う。

一 冥婚譚の新展開―卷三二六 鬼十一―(南北朝)

卷三二六 鬼十一

袁炳 宋の袁炳の鬼が積年の友人司馬遜の前に現れ、死後の世界的一端を語った。

費慶伯 宋の費慶伯は冥吏に酒食を与えて死を免れたが、妖魅に騙されたのかと疑った妻に、冥吏との約束を破り事情を話したために死んだ。

劉朗之 羅含の故宅を梁の安成王から借りて住んだ録事の劉朗之は、衣冠を着した人物が立っているのを見た。その後、劉朗之は罪により免官となり、時人は羅含のたたりであると噂した。

長孫紹祖 長孫紹祖は旅の途次に宿を借りた家で箜篌を弾く娘と一夜の契りを結んだが、翌朝になってみると、そこは小さな塚であった。

劉導 梁の天監十一年、劉導と李士炯は宴会をしていて西施と夷光の鬼と会い、一夜のちぎりを結んだ。

劉氏 梁の武帝の末年、屋敷の屋根に獅子の顔に人の手足を持つ怪物を見た劉某は、それから間もなく死んだ。

崔羅什 崔羅什は詩才を愛され魏の呉質の娘の鬼に招かれて漢魏の世の時事について聞いた後、十年後に死ぬことを告げられ、その通りになった。

沈警 吟詠を善くした風流人の沈警は旅の途次、張女郎廟に祝詞を奉り、張女郎の二人の妹に招かれて遊び、下の妹の小女郎と一夜を共にした。その後、張女郎廟において小女郎からの手紙を得た。

冥婚譚

「長孫紹祖」は典型的な冥婚譚であるが、話中に詩が見られる点が注目される。「劉導」は伝説の美女である西施・夷光との一夜の話であり、「崔羅什」は建安七子の一人である呉質の娘の鬼と古の世について語らう。従来の冥婚譚には、それによって後嗣を得る、出世のきっかけを得るという点も重要な要素であり、それ故に冥婚譚は儒教的な文脈で理解すべきものであったが、この巻に見られる冥婚譚が強調するのは、夢のような美女との風雅な一夜に尽きる。才子佳人のうたかたの風流な恋という文芸的関心に冥婚譚の重心が移行しつつあることを示す説話群であり、「沈警」はその最たるものである。日本文学にも多大な影響を与えた『遊仙窟』の成立の前史として注目すべき巻であるとも言えよう。

変鬼帰還譚

「袁炳」は鬼となった袁炳が積年の友人である司馬遜の前に現れる典型的な「変鬼帰還譚」である。殺生の罪の重さの強調など、仏教思想の

影響が強くなっているのが看取される。

冥界召喚譚

「費慶伯」は、酒食の饗応により冥吏に見逃してもらおうというもので、その事を人に語った為に結局は冥途に連れて行かれる。冥吏らが鞭で打たれて血を流しているのは、費慶伯が語った為に事実が天の知るところとなったためである。

鬼神遭遇譚

「劉氏」における獅子の顔に人の手足を持つ怪物の出現は、「梁の武帝の末年」という時代設定から、単なる個人的な凶兆であるのみならず、王朝を崩壊に導く混乱期の開始を告げるものとも解釈できる。

凶宅鬧鬼譚

「劉朗之」の注目すべき点は、その家の元の持ち主の霊が、その家に住もうとする者に災いを為す凶宅鬧鬼譚でもあると同時に、突然鬼神に遭遇する鬼神遭遇譚でもある、という点である。以降、本話のように、屋敷の元の持ち主や、その場に埋まっている遺体の鬼が出現し、崇ったり改葬を求めたりする話が増加してゆく。

二 神仙化する鬼—卷三三七 鬼十二—（南北朝・隋）

卷三三七 鬼十二

崔子武 齊の崔子武は夜毎に夢に龍王の娘と契り、病気になってしまい、医者に逢い引きを禁じられて関係を絶った。

馬道猷 南齊の尚書令史馬道猷は省中に現れた鬼達が耳に入り、魂を押し出され、人々に魂の形は蝦蟇に似ていると語り、翌日に死んだ。

顧総 梁の世、武昌の小吏顧総は愚かで県令にこき使われていたが、建

安七子の王粲の鬼に、自分の前世が同じく建安七子の一人である劉楨であり、鄴にある死者の国坤明で賄賂を取った罪で謫されて、現世の小吏となったことを教えられた。そのことを県令に述べ、顧総は礼遇されるようになったが、後に失踪した。

邢鸞 北魏の世、吏部尚書邢鸞の家は、かつての董卓の邸宅の一部で、邢鸞は地面を掘って董卓の銘の入った丹砂や銭を得たが、鬼となった董卓の返還要求を拒み、翌年に死んだ。

蕭摩侯 蕭摩侯の家で、干したままの洗濯物が夜になって人のように動いたり、戎服の騎馬武者集団に襲撃されるなどの怪事が起きた。羊の角を焼くと、鬼はその臭いを嫌って帰ってゆき、怪事が絶えた。

道人法力 広州顕明寺の道人法力は力持ちで、朝、廁で遭遇した崑崙奴の如き鬼を捉えて堂の柱に縛り付けて見張っていたが、暗くなると鬼は消えてしまった。

蕭思遇 陳の世、梁の武帝の從姪孫である蕭思遇は、父が侯景によって殺されたことにより仕官を嫌い、虎丘に閑居していたところ、雨の日に西施の鬼が来訪し、一夜を共にした。

任胄 東魏の丞相であった任胄は高歡の謀殺に失敗して誅された。家人がその事を知る前に、家に突然、任胄の首が蒸籠の上に載った状態で現れて消える怪が起きた。そしてすぐに誅殺の知らせが来た。

董寿之 北齊の董寿之が誅され、家人がその事を知る前に、夜、妻の傍らに董寿之が現れ、黙ってため息をついて出て行った。怪しんだ妻が外に出てみると、血痕があり、変事のあったことを悟った。果たして、朝になってその死が伝えられた。

樊孝謙 若くして才名のあった樊孝謙は、家の前を貴人の葬列が通るのを見て、方相の姿をした人に会釈した。ちょうど一年後、その方相が樊

の家を訪れ、驚いた樊孝謙はそのまま死んでしまった。

李文府 隋の文帝の開皇の初め、李文府の宅で、目に見えないものが水を啜ったり、文府の膝をひつかいたりする怪が有り、刀であたりを払うといなくなった。後、開皇八年に既に死んだ孔瓚が李文府を訪問し、泰山府君の役人に推挙した旨を語ったが、文府が免れんことを乞うと、方便を効かせるから人に漏らさぬよう言った。開皇十年になって、李文府はこの事を自ら話した後、すぐに気持ちが悪くなって死んだ。

史万歳 史万歳は、住んだ人を取り殺すという長安の屋敷を、その話を信じずに自宅とした。すると、夜に樊噲の幽霊が現れ、その墓所が屋敷の廁の近くにあるので別の場所に改葬するように頼み、万歳が言う通りにしたところ、樊噲は冥助を約束した。後に万歳は隋の北領軍大將軍となり、賊との戦いにはいつも鬼兵の助けがあり、戦いは常に大勝した。

房玄齡 房玄齡と杜如晦が、出世前、旅の宿で深夜に食事をした時に、燈の下から黒い毛むくじらの手が伸びてきて肉と酒を求めるような仕草をするので、ふるまってやると、その手は消えた。深夜になって、別の鬼が供え物の多い祭りに燈下の鬼を誘いに來たが、燈下の鬼は「界吏として二相の下に遣わされて、酒や肉も賜ったので行くことは出来ない」と答えた。

魏徵 魏徵は若い時、道学を好んだが、鬼神は信じなかった。恒山で風雪に遭い、誘われて道士の家に泊まり、鬼神について議論したが、道士の説を論破できず、鬼神を軽んずることをたしなめられた。翌日、恒山の隠士への書簡を託された魏徵が顧みると、道士の家は大きな塚であった。書簡は地に投ずると鼠になった。それ以来魏徵は鬼神を信じるようになった。

唐儉 唐儉が旅の途中で泊めてもらった家の人妻は、明日帰ってくる夫

を迎える準備で忙しくしていた。唐儉はこの女に言い寄ったが拒まれた。翌日、唐儉は女の夫の葬儀に出くわした。実は女は五年前に死んでおり、唐儉が泊まったのは女の墓であった。唐儉は、別の場所では、役人の寵愛を受けていた妾が、死んで鬼となった後、他の男の鬼と私通していたことが、棺を開けて発覚したのを見た。そして、男とは浮気な妾には溺れ、誠実な妻には冷淡なものだ、との感慨を得た。

冥婚譚

「崔子武」は、冥婚が夢の中で行われる点と、鬼と交わることが人間の健康を損なうという觀念の現れる説話の初期のものである点が注目される。

「蕭思遇」は、前巻の「劉導」と同じく、西施と契る話である。

「唐儉」は、鬼となった女の貞節と不貞を対比的に描く説話で、儒教的文脈における冥婚譚の新しいパターンを示している。

変鬼婦還譚

「顧総」は、うだつの上がない男が自分の前世が劉楨であったことを王粲の鬼に教えられる、というもので、道教的な謫仙の觀念と、仏教的な転生の觀念が融合した冥界觀が注目される。伝説の美女との契りを描くタイプの冥婚譚とも共通する点であるが、鬼の世界が神仙世界の一種のように描かれているのである。

「任胄」「董寿之」はどちらも誅殺された男が家族のもとに現れる話である。

冥界召喚譚

「樊孝謙」は、方相氏が対象者を直接召喚に來る点に特色がある。

「李文府」は、優秀な人間が寿命が尽きていないにも関わらず冥官に

任命される、という、後に類出するようになる話型の初期のものである。
鬼神遭遇譚

「馬道猷」は、魂が蝦蟇に形が似ているということの意味など、検討すべき点の多い説話である。

「道力法人」において、出現した鬼の姿は「状如崑崙、面目尽黄、裸身無衣」と崑崙奴のイメージを強く反映させている。崑崙奴の存在が中国で一般化するの唐代以降であるが、本話の典拠は梁代の『述異記』であり、崑崙奴の形象を小説に活用した早い例と言えよう。

「房玄齡」「魏徵」は、太宗期の名臣の代表格である房玄齡・杜如晦・魏徵の無名時の逸話であり、これらの人物への関心が説話の核となっている。

凶宅鬧鬼譚

「邢鸞」「史万歳」は、それぞれ董卓、樊噲という史上有名な人物の鬼が登場する点に特色がある。

「蕭摩侯」は、鬼が羊の角を焼く臭いを嫌うという独特の説が見られる。

三 電話で描かれる唐の始まり

— 卷三二八 鬼十三 — (唐太宗～睿宗期)

卷三二八 鬼十三

慕容垂 唐の太宗は遼に遠征した際、高い塚に立つ黄衣の鬼に使者を通して語りかけたが、相手は、没落した者を問い詰めないで欲しいと答えた。そこは慕容垂の墓所であった。

李勣女 大樹の神に攫われて死んだ李勣の娘は、神から逃れ、墓守の少

年に匿われていたが、民家から黄金を盗んでいたことが発覚して、いなくなつた。

解縻人 舟に同乗した二人の冥吏の風呂敷包みの中の書類を見た男は、二人の下僕にされ、冥吏が人を連れ去るのを目の当たりにした。

漕店人 長安の西の漕店の人が父母の葬式を豪華に行つた為に、先に死んでいた弟は冥途の駅馬を任され、その苦に堪えず、兄に交代することを願つた。兄は多くの紙銭を与えて努力するように言つたが、数ヶ月後、弟に冥途に連れて行かれた。

張琮 永徽の初め、南陽令張琮は竹の根に左目を貫かれた屍を改葬してやつたところ、後に暗殺されそうになつた際に、その鬼が救つてくれた。

劉門奴 大明宮の宣政殿が落成した際、そこに出現した数十騎の鬼の正体を、高宗が術士劉門奴に尋ねさせたところ、漢代に呉楚七国の乱を起こした楚王戊の、史書には記載されなかつた遺児とのことであつた。その地は自分の旧宅であると言ひ、遺体の改葬を要求したので、言う通りにしてやると、怪は絶えた。

閻庚 張仁亶と弟子の閻庚は、旅の宿で地府で働く地曹の鬼に酒を振る舞ひ、薄幸の閻庚の運命を好転させるには王老の娘と結婚させなければならぬと教えてもらった。地曹はすでに他の人と結ばれる事になつていた娘の縁を解いてくれ、閻庚は娘と結婚でき、出世もした。

明崇儼 鬼を見たり使役したり出来る明崇儼は、名家の人が父と母を合葬しようとしている背後から、怒る貴婦人の鬼にみすばらしい男の鬼が喜びながらついてくるのを見て、父の骨と他人の骨を間違えていることを、その人に教えてやつた。

王懷智 死後に太山録事となつた上柱国の王懷智は、蘇生者に家族への手紙を託し、その手紙を通して、弟がまもなく死ぬことを伝え、寺より

借りた物の償いをするのと弟の冥福のために写経し仏像を作することを勧めた。

沙門英禪師 鬼を見ることが出来る英禪師が、秦の莊襄王の鬼を饗応した。仏法伝来以前の人である莊襄王は、死後に功德の足りないことを責められ、常に飢えに苦しんでいることを述べた。

陳導 商人の陳導は、船旅で同船した男に酒を奢ったところ、男は、自分は冥司から火災をもたらした者に來た者であるが、金銭と引き替えに陳導の家は災いを免れるようにすると約束した。その後、果たして火災があったが、陳導の家は無事であった。しかし、陳導が金を払い済むと、自宅で火災が起こり、陳は財産を失った。

王志 益州県令の任期を終えた王志は、帰郷する途次で嫁入り前の娘を失い、寺に留まっていたが、娘の鬼がその寺にいた学生と通じたことを知り、以後、その学生を娘の夫として遇した。

巴峽人 巴峽に行く旅人が、夜、船中に泊まり、詩を朗詠する声を聞き、翌朝、その場所に行ってみると、人骨があった。

陸餘慶 沂州刺史陸餘慶は、若い頃、冬に焚き火を囲んで座っている鬼の群の中に、そうとは知らずに入ってゆき暖を取ろうとしたが、火は冷たく、鬼たちがみな面衣を着けているのに驚いて逃げた。鬼に遭遇して無事であったのは、富貴となる証と言われた。

冥婚譚

「李勣女」は、少年が鬼の少女と会い、少女から与えられたものを町で売ることにより、鬼と暮らしていたことが発覚するという冥婚譚の定型に本話も則っているが、墓守を任されていた召使いの少年と李勣の娘の間には婚姻関係はないので厳密には冥婚譚ではない。『太平広記』にお

いて本話が太宗の説話である「慕容垂」に続き唐代鬼話の第二話目に置かれているのは、李勣は唐初期の名将であり、前巻に登場した房玄齡・杜如晦・魏徵と並ぶ太宗の臣下の代表的人物であるためであろう。しかし、内容が李勣にとって名誉なものではないのは、高宗による則天武后の立后を間接的に支持したとして、李勣が後世に批判されたことと関わりがある可能性がある。

「王志」は、出典である『法苑珠林』では十惡篇邪淫部に唐代の冥婚譚の代表例として掲げられている。その話末注記に「見西明寺僧法雲本郷梓州具説如是」とあり、『法苑珠林』の独自記事である事が分かる。

変鬼婦還譚

「王懷智」は、変鬼婦還譚に分類したが、王懷智自身が帰還したのではなく、蘇生者に手紙を託すという形で、家族に言葉を伝えている。『法苑珠林』興福篇に収録されており、『法苑珠林』に記載されている本話の出典は『冥報拾遺』である。

冥界召喚譚

「解穰人」は、人が冥界に連れて行かれる過程を、通常とは逆に冥官の側から描いた、従来とは視点の異なる説話である。

「漕店人」は、葬儀を豪華に執り行った為に、死後に富裕な一族と見られて、負担の大きな職務を与えられてしまったという内容であり、過度に贅沢な葬儀を戒める説話である。

鬼神遭遇譚

本巻は唐代鬼話の第一巻目になる。その巻の冒頭に太宗の栄光と王朝の没落を主題とする「慕容垂」を置いたのは、唐朝の起源と滅亡の運命を鬼話の角度から暗示したものであろう。

「張琮」は竹の根に左目を貫かれた屍を改葬してやる話であるが、野

ざらしの髑髏が目を植物に貫かれており、苦を訴えるというモチーフは、日本でも小野小町の髑髏の目に薄が生え、霊が「秋風の吹くたびごとにあなめあなめ。小野とは言はじ薄おひけり。」と詠じたという伝説に継承されている。「巴峽人」も野ざらしの遺骨の話である。

「閻庾」と「陳導」は、酒を奢った相手が冥吏の鬼で、お礼に自らの悪運を回避する方法を教えてもらう、という共通のモチーフの説話である。

「明崇儼」は、見鬼人を通して、祖霊の世界を描写する点に特色があり、同じく見鬼人の説話である「沙門英禪師」は施餓鬼の思想が注目される。「陸餘慶」は、鬼の群れの中に人が入ってゆくという点で、日本の昔話「瘤取り」等と共通する話型となっている。

凶宅鬧鬼譚

「劉門奴」は、大明宮の宣政殿の場所が、漢代に呉楚七国の乱を起こした楚王戊の遺児の邸宅であった、という設定であり、前巻「邢鸞」「史万歳」の董卓、樊噲同様、漢代史に関わる人物の鬼が登場する。帝都として輝かしく発展してゆく長安に、その反動として漢代の古い鬼が現れるという構図として理解できよう。

四 冥事を占う—卷三二九 鬼十四—(周武則天—唐玄宗期)

卷三二九 鬼十四

夏文榮 夏文榮は、冥事を判ずることができ、人の榮達を予見したり、免罪のための祈祷をすることが出来た。

張希聖 見鬼人の馮徽は、張希聖に自宅の既に伏屍がいることを伝えたが、張は信じず、鬼に弓で射られて死んだ。

鄭從簡 左司員外郎の鄭從簡は、いつも執務室で落ち着くことが出来ず、巫者に調べさせると、執務室の地下に伏屍があることが分かったので、掘り出して改葬した。

房穎叔 官廷料理人の王老は、天官侍郎拜命の為に上京予定の房穎叔が来られなくなることを、夜半に神明に告げられた。果たして房穎叔は病で急死した。

劉諷 竟陵の掾劉諷は、夷陵の無人の館に泊まった際、夜間に冥官の妻ら数名の女が宴を催すのを見た。

相州刺史 相州刺史朱希玉宅を訪れた見知らぬ貴人が勝手に中院に入っていたので、朱希玉が中院を開いて見ると、豪華な宴席が整えられていた。驚いて酒を撒いて祈り、翌日、改めて見ると、元に戻っていた。朱希玉は、その二年後に死んだ。

王湛 冥事を判ずることができ王湛は、なかなか昇進できない叔玄武のために、その原因を調べてやり、叔玄武に隠された殺人の罪があることを指摘すると、本人もそれを認めた。

狄仁傑 狄仁傑は寧州刺史になった際、次々に刺史が死ぬ官邸の鬼を叱責し、鬼の遺体が庭の木の根に貫かれていることを知り、改葬してやったところ、怪が絶えた。

李嵩 開元の初め、太常卿姜皎の囲った女は観相を善くすると称して、諸公卿の将来を言い当て、また姜皎との情事を公卿らに覗かせていたが、李嵩が来ると、その貞正を懼れて、むせび泣きながら白骨と化した。

張守珪 幽州節度使の張守珪は、若い時に河西の主将として玉門関を守っていた。都から本国に帰る西域の胡僧の荷駄を襲ったが、僧は守珪が将来節度使になる運命であることを語り、諫めて修福を勧めた。後に守珪は賊に襲われた際、漢の名将李広の鬼に助けられた。

楊場 洛陽令楊場は、易者に余命二日であると告げられ、その易者の指示に従って迎えるの鬼を饗応し、命乞いをした結果、名前のよく似た楊錫が身代わりとなった。

冥婚譚

「李嵩」は、冥婚が本質的には規範から離れた邪淫であることを主題としており、貞正の君子の前では鬼の正体が露見する。鬼の運命予知能力も作中の重要な要素となっている。

冥界召喚譚

「楊場」は、前巻「解樸人」同様、冥界の吏である鬼が人を冥途に召喚する過程を、鬼の側から詳細に描写する点に特色がある。

鬼神遭遇譚

「劉諷」は、冥府の王や高官の妻らが冥を開き、夫の出世等について語らう。鬼吏の世界を、鬼の側から描いた説話である。

「相州刺史」は、説話のはじめに「宅西院恒閉之」とあるので、鬼が入ったのは恐らくはこの西院で、テキストに中院とあるのは誤りであろう。

凶宅鬧鬼譚

「張希聖」「鄭從簡」「狄仁傑」は、地下に埋もれている知られざる遺体「伏屍」についての説話である。「狄仁傑」に見られる、遺体が植物に貫かれて苦を訴えるというプロットは、前巻「張琮」と同工である。

冥事占判譚

「夏文榮」「王湛」は、直接には鬼が登場しない説話である。そのような説話が鬼部に収録されているのは、鬼が人の運命(冥事)を知ることが出来るということが鬼話の重要なモチーフの一つであり、これらの話は、人の身でありながら鬼と同じように冥事の情報にアクセスできる

人間の説話であるためである。このような、鬼に属する人の運命に関する情報を知ったり、運命を操作するという話型を、「冥事占判譚」として、新たに立項する。

「張守珪」も冥判を行うのは胡僧であり、修福により李広の冥助を得たのである。

五 鬼による告発・警告・断罪——卷三〇 鬼十五——(唐玄宗期)

卷第三〇 鬼十五

張果女 開元中、易州刺史張果の病死した娘は、後任の刺史劉乙の息子に通じて蘇生し、そのまま息子に匿われていたが、劉乙の知るところとなり、正式に夫婦となった。

華妃 玄宗の寵を得ていた華妃の塚が盗掘に遇い、遺体がひどく辱められた。華妃の鬼が息子の慶王琮に夢で賊の通る場所を知らせ、捕縛され処刑された賊は貴戚の不良子弟たちであった。

郭知運 巡察中に駅で急死した涼州節度使郭知運は、その魂が庁舎に帰り、四十日間、公私のことを処置した後、自らの葬儀に立ち会い、棺に身を投じていなくなった。

王光本 王光本が急死した妻を悼んで哭し続けると、妻の鬼が現れ、生者の過度の嘆きは鬼の安らぎを妨げるので止めるように言いつて消えた。妻の鬼は光本にしか見えなかった。

幽州衛將 後妻に虐待されていた幽州衛將の張の五子が母の墓前に哭すと、母の鬼が現れ、張に悲憤の詩を送り、張の訴えで後妻は流罪となった。
韋氏女 竹間の亭で逢い引き相手の隣家の息子を待っていた韋氏の娘は、七尺の怪人に襲われ、叫び声を聞いた家人が駆けつけた時には白骨

と地に流れ滴る血を見るばかりであった。娘の兄は、賄を得て逢い引きの手引きをした婢を殺し、竹を剪った。

崔尚 無鬼論の著作のある崔尚を訪問した道士が、自分が鬼であることを明かし、著作の詞理を褒めつつも、鬼神に殺されぬために本を処分するよう警告し、崔尚は正気を失ってしまった。

河湄人 黄河のほとりの白骨に食を投じた旅人に、鬼が空中から感謝の詩を詠んだ。

中官 出張中の宦官が宿泊所で寝ていると、部屋に鬼たちが入ってきて、酒を飲みつつ、連句を作り、去って行った。

王鑑 常に鬼神を侮っていた王鑑が、莊園に向かう途中、女の鬼に遭遇し、そのことを火に当たっている人々に話したところ、それらの人々も無頭の、あるいは面衣を着けた鬼であった。莊園に着くと、莊民は皆死んでおり、出迎えた者もすでに鬼になっていた。王鑑は一年後に死んだ。

李令問 生き物を残酷に殺して料理していた美食家の李令問が病になると、夜に数百名の武装した鬼が火車を随えて李令問の家に入り、李令問を火車に投げ込んで去って行った。翌日、李の遺体が、堂の西北の寝台の下で見つかった。

僧韜光 青龍寺の僧和衆は、富平の実家に帰った同門の韜光に会いに行き、韜光の出迎えを受けたが、実は韜光は十日前に死んでおり、出迎えたのは守墓人を自称する鬼が化けていた偽者であった。

僧儀光 青龍寺の僧儀光は、妻を亡くした人の家で供養を行っていたが、方違えで一家が儀光に告げずに家から退去していた晩に、面衣を着けた女性が粥を作って儀光に献じた。その女性の正体は、堂内に置かれていた夫人の遺体であった。

尼員智 尼の員智は、終南山での夏安居の最中、夜に八尺の鬼が庵の前で

哭し続けるという怪異に遭遇したが、懼れずにいると鬼は去って行った。

楊元英 武則天時の太常卿楊元英は、開元年間には死んでから既に二十年になっていたが、長安の職人の元を自分の剣の修理に訪れ、そこで出会った自分の息子達に金三百千を与えて、すぐに使い切るように言った。三日後、それらの金は紙銭になっていた。

冥婚譚

「張果女」は、鬼からの蘇生の後、冥婚や私通の発覚を懼れる若者の様子が初々しく描かれている。また、事情を知った父の劉乙の「千載所無。白我何傷乎。」という言葉には、この件が非常に珍しく、めでたいことであるという観点が見られる。前巻の「李嵩」が冥婚を邪淫として描いたのに対し、本話では冥婚は天賦の良縁と見做されているのである。

変鬼婦還譚

本巻は変鬼婦還譚の話型の説話が多いのが特徴である。

「華妃」「幽州衙將」は、鬼が生者の罪を告発する。

「王光本」は、生者が死者のことを過度に悼むことを戒める教訓的内容。

「郭知運」は、鬼が死ぬ前に公私の仕事を処理し終える。

「僧儀光」は、留守の家人に代わって、鬼が自分の供養をしている僧の世話をする。

「楊元英」は、父の鬼が子らに経済的援助を行う。

これらの変鬼婦還譚の共通点は、鬼によって現世における問題が解決する、あるいは福が与えられることであり、この話型と祖霊信仰の関わりを深さを示唆している。

「僧韜光」の韜光に化けていた鬼は、墓場に住み着いた野鬼の類いか。

本話は、変鬼帰還譚の派生話型と位置づけられよう。

冥界召喚譚

「李令問」は、他の冥界召喚譚のように役人が連行するのではなく、城郭を攻める戦のような大掛な襲撃で、李令問の魂は冥途に連れ去られる。数百名の武装した鬼は、李令問に食材にされた鳥獣の鬼と考えられる。

鬼神遭遇譚

「韋氏女」における鬼の正体は明示されていないが、兄の行動から竹の妖怪であったと解釈できる。

「崔尚」は、無鬼論者の前に鬼が現れるという類型的なもの。

「河湄人」は野鬼の詠んだ詩が、「中官」は鬼たちの作った連句が説話の中核を為す詩話である。

「王鑑」は、恐怖小説としての構成の完成度が高い作品である。火にあたる鬼の集団に遭遇する点は、卷三二八「陸餘慶」とモチーフが共通している。

「尼員智」は、性根が据わっている人間には鬼は勝てない、という多くの鬼話で繰り返されてきた主題の説話である。

まとめ

今回分析した「卷三二六 鬼十一」から「卷三三〇 鬼十五」までの鬼話は、南北朝から初唐・盛唐期を時代背景とするものであり、以前の巻の説話と比較すると、様々な変化が見られる。

一つの大きな変化は、文芸性の向上であり、作中に鬼の詠んだ詩が見られる作品も増えた。そして、鬼と人と交わりを、遊女と客の一夜限りの風雅な遊びの趣で描く遊里文学調の作品では、西施の如き伝説の美女

が担ぎ出されることとなった。

もう一つは、鬼の描かれ方の世俗化である。鬼同士の私通を描く「唐儉」、ノルマを果たす為に四苦八苦して目的の家に潜入する鬼吏の姿を描く「楊場」などの鬼には、現世の人間と変わらぬ生活感がある。

これらの変化の背景としては、「冥界」という現世とは異なる道理で構築された世界については、死者が冥途で様々な見聞をした後、蘇生するという、南北朝から初唐期にかけて大量に生み出された「冥界訪問譚」が描いており、鬼話は、異界性の強調よりも、人間に近いメンタリティを持つ鬼の内面の表現の深化に注力する傾向が強まったということが挙げられる。

また、現世の問題に異界の力が介入するという話も増えてきた。その典型的な話型が、鬼の予知能力で、出世栄達を中心とする人の運命を知ったり、変えたりするということであり、その種の説話の増加により、本稿では「冥事占判譚」という話型を、典型話型に追加したのである。

※ 本稿は科学研究費基盤研究(C)研究課題「鬼文化・冥界表象からの日中比較説話文学史の構築」【研究課題番号: 26370432】の研究成果の一部です。

注

- (1) 『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第21号(2015)
- (2) 前稿においては「変鬼帰還譚」としたが、本稿では「変鬼帰還譚」と改める。
- (3) 『太平広記』本文については、汪紹楹校点『太平広記』(中華書局 一九六二)に拠った。また各説話の解釈において、木村秀海監修・堤保仁編『訳注太平廣記鬼部一』(やまと崑崙企画 二〇〇一)を参考とした。

The ghost stories of “Taiping Guangji” vol.11~vol.15

MITTA, Akihiro

“Taiping Guangji (Extensive Records of the Taiping Era)” is a collection of stories compiled under the editorship of Li Fang, first published in 978. The book is divided into 500 volumes and 40 volumes of them are ghost story parts. In this paper, I analyzed vol.11~vol.15 of the ghost story parts. The results of the analysis, I have cleared ideological features and story types of Tang dynasty early ghost stories.